

巻 頭 言

ギッシングは1903年に46歳という若さで世を去りましたが、その当時のエドワード王朝の世界が驚異的な速度で遠ざかってしまったので、私たちはその世界との接点を見失ってしまったように感じるがよくあります。しかしながら、ギッシングの作品には私たちの時代と大いに関係している点が幾つもあるのです。彼が今まさに生き返ったならば、その境遇はどのようなものとなるのでしょうか。そんなことを想像してみると、彼については対照的なイメージが浮かんできます。物質文明の中で発展した無線通信も空の旅や宇宙の旅も知らないのですから、彼のように保守的傾向が強い教養人が方向感覚を失ったような気になるのは理の当然です。ですが、しばらくすれば彼は、人間はほとんど変化していないということに、そして道徳的な状況もほとんどストップしたままだということに、すぐ気がつくでしょう。更に、彼が死の床で予言したように、自分の書物が「明日にも忘れ去られる」ようなことはなかったと知って、喜ぶことは間違いありません。

これまでギッシングの独創性が否定されたことはほとんどありませんでした。実際に否定された場合でも、批評家が彼の作品に難色を示したのは文化的な理由からではなく、気質的な理由のためであったと思われます。自分たち自身の気質ゆえに、あまりにも隔たりのある芸術家を理解することができなかったのです。しかし、彼の小説に初めて接した人々は、大抵の場合は何か啓示のようなものを受けたようです。ギッシングが24歳で『暁の労働者たち』を自費出版した1880年には早くも、匿名による2つの書評が大胆すぎはしまいかと思える予言をしました。のちになって分かったことですが、それは非常に洞察力に富んだ予言でした。1つは「この小説は何か偉大なものを力強く予見させる」と語った『マンチェスター・イグザミナー・アンド・タイムズ』の書評、もう1つは「この作者は最終的に純文学で高い地位を得るだろう」と予想した『スペクテイター』の書評です。これらの書評の切り抜きをギッシングは大事に保管していましたが、そうした予言が十分に実現したとするならば、それは大衆作家として認められることが莫大な収入を意味していた時代にあって、ギッシングが一般読者を喜ばせるために決して迎合した

りしなかったからであると、絶對的に優位な立場で回想できる現在の私たちは断言することができます。芸術に命を捧げたギッシングは、良心の命ずるままに従い、ヴァージニア・ウルフの言葉を借りれば、「均整のとれたストレートな言葉」を使いました。彼の作品—長篇および短篇小説、そして文学的および内省的な随筆—には、おそらく5世代、6世代にも及ぶ彼のよき読者たちが認めたように、私たちの印象に残る特性があります。ギッシングの小説のどれか1つ（大抵は『三文文士』か『流謫の地に生まれて』）に出くわしたあと、そのまま年代的に最も近い前後の作品を続けて読んでしまうということは、彼を非常に高く評価している人であれば、すぐに思い出す共通の体験ではないでしょうか。それほど強く読者の注意は釘づけにされてしまうのです。

ここ数十年の間、ギッシングはその芸術の模範的な全一性の点だけでなく、たゆまなく彼が支持した価値基準の点においても称賛されてきました。彼はギリシャ語やラテン語の古典に加え、シェイクスピア、そしてトマス・ブラウン卿やド・クウィンシーといった著名な随筆家—そうした作家の選集が父親の書棚にはありました—を読んで育った人道主義者でした。これは彼の教養を育んだ一面にすぎませんが、現代生活について語った彼の作品すべてに浸透している側面です。それとなく作品に浸透させる方法においては、同世代作家たちと比較しても、大抵は彼の方が数段まさっていると言えます。彼の作品には、世紀末の芸術至上主義作家たちの最善を尽くした文体を思い出させるような、そのような教養ある気品が漂っています。ギッシングは、彼が高く評価したゲーテのように、人生のあらゆる段階における経験を総動員することで、芸術作品を創作したいと思っていました。二流の芸術家たちの作品は次第に忘却の彼方へと消えて行きますが、小説に対するギッシングの個人的な掛かり合いは、そのようなことが彼の場合には決してないと保証できる類のものでした。

ギッシングの最も魅力的な特質の1つとして、教養に対する深い傾倒があります。これは現代の評論家たちによって強調されることが多くなった特質です。そうした教養への傾倒を彼は登場人物たちの野心と挫折を通して根気よく論じました。ギッシングの大衆教育批判は、『女王即位50年祭の年に』と『三文文士』では辛辣に、『我らが大風呂敷の友』では皮肉を込めてなされています。その批判は彼自身が結局かなえられなかった人生における理想と有機的に結び付いており、社会問題において彼の頭脳明晰さが示される諸相の1つであったと、今さらながら思えてなりません。当時の社会を澄んだ目で分

析したギッシングを予言者と見なす読者が、彼の死後ますます増えてきています。新たな関心が劇的に高まった『三文文士』と『余計者の女たち』は、舞台やBBC ラジオ第4のために戯曲化されましたし、『流謫の地に生まれて』、『女王即位50年祭の年に』、そして『渦』といった真面目な小説は、リプリント版がイギリスの様々な出版社から矢継ぎ早に発行されました。このようにギッシングの作品の生命力を示す現象は、永久に好奇心をそそるものが彼にはあるということを証明しています。今日のイギリス人、そして間接的にはアメリカ人もまた、ギッシングの作品の中に自分たちのルーツのようなものを見出しているのではないのでしょうか。

社会的な不公平に対する弾劾ゆえに、ギッシングは改革者としての評価を得ていますが、人間の生活を左右する要因の多くに対して、彼がうんざりして諦めたような取り組み方を次第に見せるようになったので、理想主義的な批評家たちが彼に潜在する保守的傾向を過大評価する結果となりました。『ヘンリー・ライクロフトの私記』に見られるギッシングの厭世的な所見は、彼の生来的な曖昧性が表出したものと見なすべきですが、それによって彼は伝統を尊重する読者たちから無条件に受け入れられたのです。実際、『余計者の女たち』を出版したあと、「どんな社会平和も女性が男性と同様に知的な訓練を受けない限りは成就されない」と書いた男の中に、そして彼の分身であるヘンリー・ライクロフトの「しみつたれた土地に豊作を期待しても無駄である」という記憶に残る陳述の中に、ギッシングの本性を見出すことができます。しかし、たとえ人間に平等な能力のようなものがないとしても、ギッシングは社会的な公平さが行き渡るべきだと確信していたようです。人間の品性を低下させる貧困の影響力に関する彼の熱弁に無関心でいられるのは、心の冷たい金持ちだけではないのでしょうか。

人道主義的な点で、ヴィクトリア朝の拝金主義に対するギッシングの抗議は、その余裕が彼自身にはほとんど見られなかった気前のよさ、そして手つかずの自然を愛する心や自然保護に対する長年の関心と軌を一にしています。振り返って考えると、そうした自然への愛や関心ゆえに、ディケンズやギャスケルの流れを汲む初期のエコロジストとしてギッシングを位置づけることができます。周囲の環境の質に対するギッシングの強い感受性は、最初は吐き気を催すほどの汚染が生活に蔓延していたウェイクフィールドやマンチェスターの時代に、それからロンドン中央部のスラム街で生活した日々において、彼が耐え忍ばねばならなかった苦しい生活状況から生まれたものです。それで彼は即座に、このように産業によって神聖な地球の表面が汚され

ることと、節度のない広告のせいで都市の景観が損なわれることを一括して扱うようになったのです。ギッシングは手つかずの田園地帯を何度も描いていますが、それは商業中心の都市の情景が断片的に皮肉を込めて描かれるのに対し、非常に叙情的な描写となっています。自然環境保護論者としての彼の思想は、もともとは彼の文学趣味に促された芸術至上主義的な美の追求から生じたものですが、最近では都市計画者たちに取り上げられることも少なくありません。

しかし、私たちがギッシングの人生哲学の如何なる側面に重きを置こうとも、彼の模範的な人間性に対して絶対的な信頼と尊敬を私たちに抱かせてやまないのは、彼に深く根差した平和主義ではないでしょうか。『渦』、『命の冠』、そして『ヘンリー・ライクロフトの私記』といった書物は、人間の歴史が悪夢のような恐怖の連続であったことを示していますが、1世紀が経過した今でもなお、この叡智に溢れる3冊の本でギッシングが呼び覚ました恐怖とまさに同じような、身の毛のよだつような戦争や大虐殺が実際に起こっています。私たちが同様に羨望的である叡智を果てしなく追い求めるのであれば、ギッシングに助言を求めることが最も有益だと思えます。このことは、1909年に『ヘンリー・ライクロフトの私記』が初めて邦訳されて以来、数多くの日本の読者がなさってこられたことです。ですから、21世紀における日出づる国の読者に対して、イギリス人でも日本人でもないギッシング研究者の私が、この記念論文集を紹介できることは、身に余る荣誉だと言わずにおれません。

これまでギッシングに関しては相当の量に達する研究が日本で行なわれてきました。自分の芸術を献身的に支持してくれる人が日本に少なからずいるなどと、おそらく当のギッシングは最も楽観的な気分の時でさえ思いもしなかったことでしょう。この作家の「発掘」が日本で始まったのは、1920年代初頭に増大していた学生読者層のために、研究社の英米文学評傳叢書がギッシングの紹介を引き受けてくれた時のことでした。ギッシング研究の分野では西洋でほとんど全く知られていない日本の先駆者たちの多く（特に織田正信氏）は、今にして思えばただもう称賛する他ありません。この作家について1933年に上梓された織田氏の小さな本は、その3年前に氏によって出版された原書『埋火』の注釈版と同様に、今では稀覯の古書となっています。それ以来、ギッシングの大小さまざまなテキスト—『人生の夜明け』から『下宿人』まで、『イオニア海のほとり』から『ヘンリー・ライクロフトの私記』まで、初期の短篇小説から晩年の短篇小説まで—に関して、たくさんの日本人が注

積を施してきました。とは言え、そうした注釈者たちの功績も、小池滋教授の監修下で秀文インターナショナルのために骨を折られた土井治氏、溝上和雄氏、太田良子氏、金山亮太氏、それから個別に尽力された倉持三郎・晴美夫妻や松田銑氏といった尊敬に値する翻訳者チームの功績の前では、影が薄くなってしまいます。

ここまでは個人の感情を交えない口調で述べるのが私にとって形式上必要でしたが、そうした口調を小池教授に対しては止めることによって、彼に敬意を払うのが私自身の義務であり、また同時に喜びでもあります。これまで200冊以上の書物を出版し、その100冊以上が今なお購入可能であるという点だけでも、彼は私が知っている西洋のどの研究者よりも意欲的な人物だと言えます。鉄道に関する文学および文化的な多くの書物、そして探偵小説に関する同じように数多くの書物が、彼の仕事には含まれています。また、ディケンズの主要作品の多くは彼の手によって翻訳されたと聞いています。1960年代からのギッシングに関する彼の活動については、1965年にロンドンで在外研究中だった彼が私に会うためにパリまで来てくれた3ヶ月後、ジェイコブ・コールグ氏や私と一緒に発行の手助けをしてくれた定期刊行物『ギッシング・ニューズレター』の創刊号を読めば、正確に知ることができます。彼の恒常的な協力がなかったならば、日本におけるギッシング情報の大半は『ニューズレター』とその後継誌『ギッシング・ジャーナル』にたどり着きはしなかったでしょう。また、ギッシング研究で活躍している二人の優秀な日本の仲間と私との間には、長年に及ぶ有益で友好的な接触がありました。北條文緒教授はヨーロッパとアメリカの学者の絆を強固なものにしてくださいただでなく、外国の読者のために日本語によるギッシングの翻訳を論評してくださいました。松岡光治氏に対しては、本書へ寄稿するように私を誘ってくださったことに感謝の意を表わすと同時に、ギッシング研究に役立つ非常に貴重な今回の出版に祝辞を述べなくてはなりません。ギッシングの全作品の電子テキストを取めた彼のウェブ・サイトは国際的な認知を受けました。彼はヴィクトリア朝研究の枠組で西洋と東洋の立派な架け橋となっています。彼と勤勉な友人たちのおかげで、日本におけるギッシング研究の前途は有望で信頼するにたるものだと言えます。

ギッシングがピレネー山脈の村イスプールで息を引き取ってから100年が経過したわけですが、研究者たちが骨身を惜しまずに彼の生涯と作品を調査した結果、彼はヴィクトリア朝で最も有名な小説家の一人となることができました。しかしながら、更なる情報の探求や彼の作品の分析は、決して終

わったわけではありません。21世紀がギッシングの崇拜者たちに何を提供することになるか、それを予想しようとするは無分別だと言わざるを得ません。どう見てもまだ今のところはアメリカの個人収集家の手にあるとしか思えない『無階級の人々』や『余計者の女たち』といった幾つかの主要作品の原稿、1930年代に姿を消した(部分的には出版されている)ひと束の新たな自筆の手紙、そして極端な楽道家でさえ残存しているなどとは思わない他の数点の書き物が、忘却の淵や全くの暗闇から突如として現われるかも知れません。しかし、そうした希望がたとえ夢物語じみているにせよ、現存する原稿を使った校訂を通して組み直されるテキストの新版、すべての短篇小説と雑文を集めた著作集、そして運命の女神の微笑によっては、美装を凝らした全作品集が花となって咲き誇るかも知れません。ギッシングが(死の床で叫んだように)「我慢して待つこと」を私たちに熱心に説いているような声が—ジョージ・エリオットの有名な詩の中で「見えざる聖歌隊」と呼ばれた名声不朽の作家たちの間にいても、すぐに彼だと分かる特有の声が—私には聞こえるような気がします。

2003年4月15日

『ギッシング・ジャーナル』編集長
ビエール・クステイヤス

